

私の歩んできた道

内田良男

私が大学に入った時は既に第2次大戦が始っていました。それまでに華々しく報ぜられた戦果が色あせてきた頃であります。市民の生活が日毎に貧しくなるのが肌身にひしひしと感じられる頃でした。量の貧困はやがて質の貧困をもたらすのでありましようか、航空機の部品交換が思うようにいかないという話を耳にしました。戦略物資の備蓄や補給、戦闘配置や遂行のまづさから戦果が思わしくないことも聞くとはなしに聞いたものでした。当時どなたが提起されたかは知りませんが、世間に統計的ものの考え方が大切であるという主張が浮んできました。

しかし、それより前に確率に基礎をおく統計学を振興すべきであるという気運が沸々と昂り、昭和16年には統計科学研究会が結成され、それがテコとなったのでしょうか昭和18年の学術研究会議の建議に呼応して、昭和19年に統計数理研究所が創設されました。

私はこの年に大学に入ったのであります。当時、数値計算は歯車を手で廻す器機に頼っていました。データを、穴をあけてカードに移し、それを機械的に流して集計する統計機械はありましたが、その機嫌のよい時が少く頼りになりませんでした。大学の研究室が戦中に疎開し、戦後に移転するというまことに目まぐるしい時期でありましたが、教職員と学生が一致協力できたからこそその困難な時期を乗り越えることができたのでありましよう。私は、大学で統計学は諸科学に貢献しうるもの、統計手法に関する知識体系であり、独立した科学としての地位が確立されるべきことを学び、爾来統計学の教育と研究に携わってきました。

統計学の性格から種々の分野の方々と交流する機会に恵まれました。私自身が行った、あるいは私が密度濃く参加した代表的な仕事について、時代を追って触れてみます。

昭和25年前後：戦後の、極度の住宅難時代にあっては、居住容量の把握が急務でありまして、実際に調査を行

った調査方法を検討しました。後には課題の重点が絶対量の把握から居住の質的評価に移り、採点評価法の研究がなされました。(住宅調査に関する統計的方法の研究)

昭和30年前後：我が国で検察官、裁判官あるいは弁護士となろうとする者は、司法研修所の修習生となる必要があります。したがって、その採用定数が将来の法曹人口を決定づけます。法曹人の仕事は社会情勢と不可分であって、法曹人の需要予測とそれに質的量的に見合う法曹人の供給という問題があります。司法修習生の採用定数を決定するための基礎資料を提供することが直接の目的でありましたが、問題の全貌を念頭において法曹人口問題を扱いました。(法曹人口問題に関する統計的研究)

昭和35年前後：戦後のラジオ・テレビの復興・発展は目覚しく、NHKは世論や放送番組の視聴を把握するために、比較的早期に全国規模の標本調査法を確立しました。日本の経済復興と相俟って、国民生活の諸相に激しい変化が現われました。そこで、24時間の過し方を全国規模で、四季の差を含めて把握しようとした研究に参加しました。生活行動の分類や行動時間の測定等が検討されました。(国民生活時間調査)

昭和40年前後：国家公務員上級職の専門職として、当初に数理統計職が設けられました。その後数理・統計職となり、やがて数学職と改称されました。これは大学教育と深い関わりがあります。国立大学に統計学の講座はあるものの、統計学科も統計学部も置かれていないことによります。(大学における数学専門教育、統計教育の調査)

私は昭和42年に名古屋大学教育学部にお迎えいただきました。爾来、集団指導体制をとる教育心理学科において統計学及び統計教育の内容と方法について貴重な体験を致しました。今後はこれまでの体験を基礎に統計学の在り方について私なりの見解をまとめるべき時期になったと考えています。